

広土会新聞

第11号

2007.3.1 発刊

発行所 広島工業大学 広土会
〒731-5193 広島市佐伯区三宅2丁目1-1
TEL 082-921-3121

土木の魅力探し



広土会会長
島 重章

広土会会員の皆様ならびに広土会へご協力
いただいております皆様、益々ご活躍のこと
とお慶び申し上げます。

まずは初めに、皆様へ鶴学園のことをご連絡
いたします。鶴学園創立者 鶴 襄名誉総長
が、昨年12月21日に、91歳で亡くなりました。
偉大な功績とともに広島工業大学を中心
とする鶴学園を築き上げてられました。広
土会の記念行事にも参加され、多くの会員と
の親交を深められました。また、学校法人鶴
学園は創立50周年という記念の年を昨年迎
え、多くの記念行事が行われましたことはご
承知のことと存じます。これから完成する大
学新講義棟の建設など、鶴 衛理事長・総長と
ともに、更なる飛躍を目指しております。

さて、日本の社会は近年、交通、通信、物
流など、私たちの周りのインフラ整備が進み、
生活は便利になりました。居ながらにして日
本中、いや世界中の情報や製品や食料が手に
入ります。都会では24時間様々なサービスが
受けられます。いまや日本全国で多少の違い

はありますが、どこにでも感じられることで
あり、私たちの暮らしは豊かになりました。

このようなよき環境の中で育った若者たち
は、インフラ整備の恩恵を当たり前のことと
受け止め、誰がどのように作ったかすら知ら
ないことに驚かされます。これは最近私が近
隣の高等学校へ出張講義に行ったときに感じ
たことでありますが、誰もが朝起きて水が飲
めること、それも1年中何の心配もなく利用
できること。街の高校生たちはゴム長靴を持
ってない、知らない、使用することがない、
それは通学路や周辺の道路が整備され舗装が
行き届いていること。街の中の河川は公園化
され、生物の住める水辺の整備が行われ、環
境に配慮された街づくりが進んだこと。これ
らは誰が作ったかを尋ねても何ら返事は返っ
てこない現実を実感しております。

私たちが土木建設事業を通じて関わったこ
とは、私たちがの生活の基盤である社会基盤整
備を通じて国民生活の利便性を高めることと
同時に、安全で快適なインフラ整備の追求で
ありました。今日まで先人たちが築き上げて
きた技術を継承し、更によきものをつくり、
残してきたのです。しかしながらこのよき技
術が、若者たちに知られていないという事実
を、私たちは受け止めることの必要性を感じ
ております。

土木技術がもたらしたものは何であろう

か。安全で快適なもののづくりとして作られて
きた土木構造物の魅力を、その技術を、いま
私たちの手で発掘し、若者たちへ伝えていく
ことが必要であると考えています。そしてこ
のことが次世代を引継ぐ土木技術者の育成に
大きく関わってくると思われます。

本学における旧土木工学科は、平成18年の
入学生から建設工学科が都市建設工学科へと
名称を改め、新たな土木工学の道を教育す
る取り組みを始めました。前述の通り、若い
人の土木離れが全国規模に拡大した今日、本
学における学生定員の確保にも大きな影響を
及ぼしてきたからです。そのための構想は、
就職・進学指導を強化すること、入試・教
育制度の一体化を計ること、および入学生の
教育・支援を充実させることの3項目を掲げ、
広島工業大学の基幹学科としての存続と発展
をめざし、明日の土木技術者（シビルエンジ
ニア）を育み、『打てば響く土木技術者』の育
成に取り組んでおります。

広土会の皆様には、このような現状をふま
えて、母校、都市建設工学科へ多数の受験生
を送り込んでいただきますよう、一層のご協
力をお願い申し上げます。

最後になりましたが、会員の皆様方の益々
のご健勝とご多幸、ご活躍を祈念し、巻頭の
ご挨拶と致します。



新講義棟 2008年竣工予定

新任のあいさつ



就任のご挨拶

建築工学科・建設工学科 講師
貞末 和史

「広土会」の皆様はじめまして。2006年10月に建築工学科（建設工学科併任）の講師に就任しました“さだすえかずし”です。建築構造が専門です。広島工大に来て4ヶ月経ちましたが、まだまだ就任一年目で大学講師としても一年生です。勝手のわからないこと、初めての経験に突然出くわすことも度々あり、今回、「広土会新聞」の原稿依頼を受けて、「広土会」のことも初めて知りました。この機会に自己紹介させて頂きたいと思います。

広島工大に着任する直前までは、関東の大学に2年間勤めていましたが、元々は産まれも育ちも広島で、人生の90%以上を広島で過ごしています。猛烈にカーブファンで、80年代のカーブ黄金期に少年時代を過ごした世代です。将来は野球選手になり、広島市民球場で活躍することを目指した野球少年でした。子供の頃から毎年通い続けている広島市民球場でのゲームが数年後には見られなくなるのは少し寂しいですが、広島駅近くに予定されている新球場建設の勢いに乗って常勝カーブが復活することに胸を膨らませています。また、広島駅前には、高さ185m・52階建の中四国一の超高層ビルの建設も予定されています。東京などの都心と比較して、地方では建築工事で魅力あふれる構造物が少なく、身近にある建物から日々刺激を受けて建設系の学問を学ぶことができないため、地方の大学は不利な面もありましたが、広島駅前の再開発事業や広島市民球場跡地利用の展開、さらに身近には、2008年に10階建ての新講義等が広島工大のキャンパス内に誕生します。これから広島工大で学ぶ学生は、これらの計画段階から発展までの過程を間近で見て吸収することができ、大きく刺激を受けると思います。振り返れば、私が建築を志したのも、高校の修学旅行で初めて東京へ行き、新宿の超高層ビルを見上げて大きく感銘を受けたことにあります。机上の学問に偏することなく、将来自分が関わっていく仕事を直接見て感じながら学んでいける教育環境作りに取り組んで行こうと思います。

私がこれまで指導を受けてきた諸先生方の教を次世代へ伝えるだけでなく、広島工大でしかできない創意工夫と私にしかできない情熱を持って、教育と研究に取り組んで行こうと思います。今後ともよろしくお願いします。

退任のあいさつ



退任のご挨拶

建設工学科 元教授

浅野 照雄

定年前に退職をした私が同窓生の皆さんに頑張れなどと無責任なことも言えませんでした、長らく学生の教育を担当し、OＢの皆様のお世話を受けてきたものとして、在職中

の私の教育観をご理解いただくことと、これまでの皆様のご厚情に感謝申し上げることで、ご挨拶に替えさせていただきます。

私は、昭和59年4月に工学部建築学科に赴任して以来22年、この間、平成元年土木工学科へ移籍し、さらに、土木・建築の再編成で土木系の都市工学コースさらに建築工学コースと所属が転々と変わっていく職歴でした。このため担当科目は構造力学（材料力学、静定・不静定構造力学、マトリックス構造解析、塑性解析）、構造振動学・耐震工学、土質力学・基礎工学、水理学（静水圧、流体力学）、構造設計演習、システム工学、測量学・測量実習、電子計算機学、製図法・CAD概論、学生実験（振動）などとコンクリートと鋼構造以外の広い分野に渡っていますが、このうち構造力学の基礎は一貫して担当してきました。

私の教育観は自分の大学時代から固まって来ていると思います。当時人間的に未熟な私は学問だけでは意味は無いと考え、人間形成と学問習得の両面が課題でした。そのため、研究室の決定も教官の人格が大きな要素になりました。未だに、人間的に未熟ですが自分を見つめる姿勢は崩していません。学生にとって教師の影響は大きいと感じていましたので、自分が学生から教師に立場が変わったとき、学生の立場を常に意識して行こうと思い、教育の基本姿勢として学生の目線から考え、培われてきた自分なりの良心に基づき行動することに努めました。

教育については、学生の持つ能力を引き出し伸ばし、出来れば目標のレベル以上にすることが教員の務めと考えていました。そのため、学生の学習意欲を高めるために分かり易い授業をする一方、学生の学力は多様でしたが、それなりに能力の向上を目指して、学生には授業を通して出来る限り努力して学習するように指導し、努力が報いられるようになるまで努力を期待しました。赤子が幾度も転びながらも立ち歩く努力と同じようにして、はじめて学問が身につくものだからです。今日の脳研究で云われる脳神経細胞の連結に相当するものでしょう。力学基礎は今後の学習に極めて大きな影響を及ぼすので、理解できない学生に次年度再受講を期待するわけに行かず、その開講期に出来る限り多くの学生が理解できるように多い時は数回再試験を行いました。構造力学では力学的な見方が出来るようにすることが狙いなので、荷重も少し複雑にして、白いキャンパスに絵を描くように思考回路を自分で組み解答させる課題を出しましたが、単なる暗記物として学習した学生には多分レベルが高いと感じたかもしれません。しかし、とにかく毎年80%程度以上の学生が単位取得していきました。こうして、私はどのような学生にも同じような対応をしてきたので、中には辛い思いをした人もいたのではないかと思います。ただ、明らかな手加減は人格を傷つけますので、失敗した人にはチャンスを多く作り、それを通して目的への努力を期待しました。私は、授業を社会に出てから必要になる「目的達成までの過程」として一種のトレーニングの場としても捉えており、「諦め」は最も評価を低くして見ておりました。そのため、私には緊張感がいつもあり学生の動向に気を使っていたので、最後まで諦めず再試験にチャレンジしてくれる学生が多いことに安心しました。このような授業を通して学生が少しずつでも自信を持てるようになることが究極の目的でした。

授業以外では、建築学科時代の学生の就職開拓では、病氣療養中のH教授と夏休みの暑い大阪を歩き回ったことが強烈な印象を受け、その後数年間は求人がほとんど無かった上場企業を主にして、時にはT教授の応援を受けて大

阪・東京を毎夏合わせて20社程度訪問して回り、少しずつ求人の数を増やしていきました。一方、相応する学生の教育が必要であったことは言うまでもありません。この努力の成果が今日まで生きているものと信じたいものです。

私が退職することを授業時に話しましたら、静かに聴いていた学生の中の一人から勇気ある「いまだ！」という声が上がりました。いや、もしかしたら私が勝手にそう聞いたのかもしれませんが。ただ、その声がいまだに胸に残り、この20余年間の在職で最も心のこもった気持ちとして聞きました。私を送り出す言葉としてその言は正に「萬金に抵る」ものであり、これ程嬉しく、有難いものはありませんでした。

今は、在職中の運動不足がたたり肥満気味で、成人病も危惧される状態なので、毎日夕方から1万歩の散歩をし、5kg減量しました。1万歩を1万円と考えて、1万円稼ぐのは大変だなとか、小さな1歩1歩が大事だとか人生を考えたり、季節ごとの庭木の花の華やかさや香りに驚き、青い空と山の端に沈む夕陽に映える雲を見て感動し俳句を作ったり、また、暗い道で迷っているお年寄りを目的地まで案内したり、老婆を安全に横断させたり、公園の吾妻屋で読書したりなどして、在職中には無かった心の中の潤いを感じて結構楽しんでおります。

今や社会では、杜撰さや失言などで謝罪をしている報道が絶えません、人の言動には人格が現れるもので、私も、教育者ぶっていると云われた時は自分の人徳のなさを恥ずかしく思いましたし、また、悲しくも思いました。今後は、まだまだ修行をしなければいけませんが、生かされた余生を有意義に過ごして行かれれば幸せと思います。貴重な紙面を汚してしまいましたが、最後に、同窓生の皆様には健康に留意され、益々のご活躍をお祈りすると同時に、今まで頂きましたご厚情に対して心より御礼申し上げます。



学生諸君、自立をめざせ

建設工学科 元教授

水野 信二郎

最近の日本の状況を見ると、日本人の多くが青年、壮年、老年を問わず精神的にも経済的にも余りに不安定で余裕がなくなった様に思われる。更に、北海道夕張市などの様に地方都市が破産状態に追い込まれたニュースを聞くと、個人だけでなく地方の都市生活のレベルまでジリ貧に陥っている事がわかる。国は富み外国に多額の援助をしているというのに、日本全体を覆うムードは暗い。敗戦で生活がどん底に陥った昭和20年代の日本、国は貧しかったが、人々は雑草の如く逞しかった。現在は、その逆である。日本はどうすれば安倍首相の云う「美しい国」、「元氣な国」になれるのだろうか？ 日本政府は教育の再生に躍起だが、若い学生諸君がまず自らを鍛え自立を志向しない限り、明日の日本はありえないと思う。

学力不足のため大学の授業についてゆけず、挫折し悩んでいる学生が多いのではないだろうか？ 人により様々だが、一度も挫折を経験しない人間なんていないと思う。挫折は誰もが経験するし、自分自身の内部から出発を始める人生の出発点なのだ。問題は、如何にして現在の苦境から抜け出すかにある。その第一歩は、自分の適性・特徴は何処にあるかを考え、全力を出し切っても悔いのない人生・方向を模索し見つける事である。単位の取得やアルバイト

◆営業業種◆
建設コンサルタ
測量業
地質調査業
補償コンサルタ
建築士事務所
計量証明事業者
建設業

株式会社 荒谷建設コンサルタント
代表取締役 荒谷 寿一
〒730-0831 広島市中区江波西1丁目25番5号
TEL(082)292-5481 FAX(082)294-3575

大地と大海が私たちのフィールドです
AOKI
総合建設業

株式会社 青木組
代表取締役 瀬尾 政彦

本社 〒722-0035 広島県尾道市土堂二丁目8番14号(青木ビル)
TEL(0848)23-3131(代) FAX(0848)22-8371
東京本店 〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町三丁目四番二号
秀和第一茅場町ビル
TEL(03)3665-9621(代) FAX(03)3665-9622
営業所 広島・川崎・東北

総合建設業

占部建設工業株式会社
代表取締役 占部 誠

本社 〒720-0816 福山市地吹町18番16号
TEL(084)922-1254 FAX(084)922-1276
広島支店 〒738-0004 廿日市市桜尾二丁目8番3号
TEL(0829)32-1224 FAX(0829)32-8779
井原営業所 〒715-0022 井原市下出部町二丁目22番4号
TEL(0866)67-1300 FAX(0866)67-1215
広島営業所 〒731-5135 広島市佐伯区海老園4-4-44
TEL(082)921-2617 FAX(082)921-5443

3年生になった頃から、先生が就職活動について話されることが多くなりました。しかし、私は何から始めたいのかわからない状態でした。その中で、インターンシップ制度があることを知り、授業と仕事との違いを学びいい機会になると思い、参加することを決めました。

実習先は、呉市役所土木建設部土木課です。実習先を選んだ理由として、合併により呉市が身近なものになったからです。呉市は、広島県内でも急傾斜地の多い地域であるため、集中豪雨や地震により、多くの被害の受ける地域です。私の住む地域の災害対策について知りたいと思ったことがきっかけとなり、呉市役所で実習させてもらうことになりました。

実習内容は、急傾斜地崩壊危険区域指定に至るまでの流れを学ぶとともに、実際の工事現場の見学をさせていただきました。慣れない環境と、授業では習っていないことばかりで、始めは緊張の連続でした。しかし、職員のみなさんが声をかけてくださったり、わからないことを丁寧に説明してくださったり、本当にいい職場で実習させていただいていると実感しました。また、施工方法の変更説明の同行・係り内の検討参加など、学校生活では決して経験することのできないことまで、経験することができました。

アルバイトをしたことがない私にとって、2週間のインターンシップは不安ばかりでした。しかし、時が経つにつれて、学校との違いが多く、とても楽しくなっていました。実習期間はあっという間に終わり、当初の目的以上のことを得ることができました。住民のための仕事は、想像以上に大変なものです。希望に答える立場として、困難なことの方が多いと思います。しかし、その困難な要望が聞き入れられたときの、住民の喜ぶ姿はとても印象的でした。だからこそ、職員の方は、やりがいと誇りを持って仕事ができるのではないかと感じました。

2週間という短期間ではありましたが、今は充実感でいっぱいです。多くのOB方の活躍を実感し、私も「災害から人を守る、人に喜ばれる仕事」をしたいと思います。それにより、就職活動を真剣に考えるようになりました。私を受け入れてくださった呉市役所を始め、御指導してくださった方々に改めて感謝したいと思います。インターンシップを通して得た知識・経験を残りの学生生活、そして就職活動に活かしていきたいです。



国土建設フェアについて

建設工学科（社会建設工学コース）
谷口 太一（4年）

私が参加した国土建設フェアは、平成18年9月29・30日に中国地方整備局により広島グリーンアリーナで開催された。中国地方の社会資本整備の現状及び必要性や効果、これを効率的に整備するためのコスト縮減や環境に配慮した新技術、新工法等について広く一般的に理解を深めることを目的とされ、行政10機関・民間27団体が主催する土木のお祭りのような大会です。その中で私は、中国地方の大学・高専で土木工学を学ぶ学生の研究発表を紹介する「土木って何？～大学・高専でどんなことがまなべるの～」という企画で10分間程度発表をさせて頂きました。

私が発表した内容について説明します。私が発表したのは研究発表ではなく、「土木がやらねば誰がやる！」と題した公共事業の将来展望です。研究発表をしなかった理由は、

就職活動の際に就職試験対策として公共事業の将来像についての自分の見解を小論文にまとめていたことと、私の指導教官である宇野 尚雄先生から「相手の意図をくんで発表せんと。」という御助言を頂いたことでした。つまり、話を聞いて頂く一般の方々には、専門の研究発表をしても一語の専門用語もわからずにただ退屈なだけ、一方、主催者の方々は土木の良い所・必要性をもっとたくさんの方に理解して頂きたいと思って開催されたはずですから、私の考える選択肢は一つしかありませんでした。

公共事業予算の縮減・基盤施設の寿命・2007年問題等、現在の土木が厳しい状況にある中で、『多角化』というキーワードを掲げて、視点（事業目的）を多角化して、地球上の全生物が容易に利用でき、愛することのできる構造物を造ろう、主体（事業）を多角化して、PFIやアダプト制度等、民間の活力（資金やノウハウ）を主体として必要な社会資本を整備しよう、焦点（便益・効率）を多角化して、維持管理ではトータルコストにピントをあわせよう、事業（対象）を多角化して、建設業の余力を地域の活性化に利用しよう、というのが私の見解でした。このことを決められた時間内に、どう説明したら一般の方々に受け入れて頂けるか、それが一番の課題でした。それを克服できたのは、宇野先生をはじめとして、宇野ゼミ院生の方々、宇野ゼミ生が何度も何度も練習に付き合って下さって、御助言、御声援いただき、自分の力では創造できないほどの素晴らしい作品に仕上がったと誇りに思っています。心より、深く感謝する次第であります。

国土建設フェアについて

建設工学科（社会建設工学コース 中山研究室）
池田 将人（4年）
田村 雄歩（4年）
野村 厚文（4年）
山光 涼平（4年）

2006年9月、広島グリーンアリーナで開催された国土建設フェアにおいて初の試みである『橋の模型コンテスト』が開催されました。そこで、我々中山研究室4名は、橋の模型コンテストへの参加を決意し、国土交通省より配送された木材を利用して橋の模型の作成に取り組みしました。

まず、どのような型式の橋にするか、意見をぶつけあいました。模型の大きさは幅10cm、長さ50cmという規定がありました。その中で、現実性のある橋を作りたいという意見から、曲線桁橋を選びました。その理由として、例えば河川を跨ぐ橋梁は、兩岸の既設道路の線形によって直線橋であったり斜橋であったりしますが、場合によっては曲線桁を用いるのが最も好ましい場合があります。都市内の高架橋においても同様で、単純桁は比較的少ないと思われるのですが、ビルとビルの間を縫って走る橋梁の場合は曲線桁を使用せざるを得ません。このタイプの橋梁に対するわが国の設計・架設技術は世界でもトップクラスであることから、今回はケーブル構造ではなく桁構造を選びました。総幅員16m、支間長80mの鋼曲線箱桁橋を想定し、模型を作成しました。

作成するにあたり、どのようにして真直ぐな板を曲線にするのか検討しました。発案した方法が、木材を水に1日浸すことで柔らかくし、釘で作成した型にはめ込み、乾燥させることで、曲線を表現するものでした。しかし、たとえ曲げることが出来ても、少しずつ元の形へと戻ってしま

い、設計図どおり組立てることが出来ず大変苦労しました。

我々は、単に模型を作成するだけではなく、外見にもこだわりました。アスファルト部分は、木くずを表面に付着させ本当のアスファルトのような質感をもたせています。中央分離帯のポールは本物そっくりで、オレンジ色のポールに白いラインは現実的にできています。車道だけでなく、歩道も作成し、ガードレールや、速度制限表示など、細かな部分にもこだわりました。また、街灯を設置することにより立体的な模型ができました。

この作品で、我々は最優秀作品賞を受賞することが出来ました。橋の模型コンテストに参加したことで、物造りの基本を再確認することができました。本コンテスト参加に伴い、建設工学科、中山隆弘教授には多大なるご協力をいただき、ここに感謝の意を表します。



支部だより



関東支部だより

関東支部長

西尾 修一（5期生）

関東支部は、東京、神奈川、埼玉、千葉と一都三県に広がる地域に名簿上約100人の会員を抱えた支部です。

前回の支部だよりでも記述しましたので詳しくは省きますが支部は、2期生の発案で昭和53年に発足し、すでに28年近くを経過しております。

この間の総会開催場所は、青山にかえたこともあります。私の記憶する限りここ20数年は集まりやすい御茶ノ水で開催しております。

昨年2月25日(出恒例)の東京ガーデンパレスにおいて広土会副会長である大東先生をお招きして第18回関東支部総会を20名の参加で行いました。

梶野前支部長から支部長職を引き継いで最初の総会開催でもあり、参加人数、挨拶などでかなり緊張したことを覚えてしています。

大東先生からは、大きく変化している大学の近況をお話いただきました。その中で卒業生の就職もさることながら、どちらかというと少子化に伴う受験生の確保に関心が移ってきているように感じました。

振り返って支部の問題として「団塊の世代」、「2007年問題」があります。

1947年から1949年の3年間に生まれた団塊の世代の人口は約680万人です。

これは、その前3年間に生まれた世代460万人と比べても47%多く、そのあと3年間に生まれた世代590万人と比べても15%多いという突出した世代です。

2007年問題は、この団塊の世代が2007年から定年を迎え始めることにより、労働人口の急激な減少、この世代がもつ匠の技やノウハウといった数値化しにくい技能や暗黙知の部分が失われるのではないかと心配するものです。

支部の中では、2期から4期の先輩方で会員名簿中30%弱にあたり今回の総会出席者の約半数を占めます。

28年前、30歳前後の先輩方が集まり、関東の地に親睦を

道路埋設指針

建設大臣認定擁壁

P Cボックスカルバート

ザ・ウォール（H=5.0m）

 **株式会社 マシノ**

本 社

〒733-0822 広島市西区庚午中1-19-23

(082) 507-2757 (代)

東広島営業所

〒724-0302 広島市豊栄町別府270

(082) 432-4132 (代)

福山支店

〒720-0805 福山市御門町2-5-39

(084) 925-8855 (代)

山口支店

〒754-0002 山口県山口市小郡下郷1130

(083) 973-3533 (代)

山陰支店

〒695-0003 島根県江津市松川町下河戸188

(0855) 55-0124 (代)

本 店

〒699-5133 島根県益田市神田町口615

(0856) 25-2380 (代)

工 場

広島・江津・益田

ヒューマン・コンシャス。

それがわたしたちの原点です。

MASUOKA

Architectural Contractors Inc.

 **株式会社 増岡組**

代表取締役社長 増岡 真一

広島本店 広島市中区鶴見町4-2-5 ☎082(504)5050

呉本店 呉市中央1-6-2-8 ☎0823(21)1441

建設コンサルタント（第5929号）

旧社名：和幸土木設計株式会社

 **株式会社 和幸設計**

代表取締役 **磯 亀 兼 吾**

HP: <http://www.wakonet.jp/>

本 社 〒739-2106 東広島市高屋町稲木2927-2

TEL(082)439-0380 FAX(082)439-0384

広島支社 〒730-0847 広島市中区舟入南2丁目5番11号

TEL(082)295-2985 FAX(082)292-6451

のみに時間を追われる大学生生活を送っていると、自分の将来を誤るだろう。若い時に真剣に自分の人生を模索する、それが大学で学ぶ意義であり若者を成長させる原動力である。自分で選んだ人生が自立の道であり、全力で目標に向かい自分を鍛える事が大切である。現代の若者には余りに先生や識者など他人に頼り過ぎる風潮があるが、それのみでは人間は育たない様に思う。自分から出発し、自分を鍛え磨いて行けばやがて自信が生まれるだろう。人間にとって一番大切な事は自信を持つ事である。国際競争が激しくなった今日のグローバル社会で、若い人々がその知恵と能力を発揮できる周囲の環境は相当厳しく容易ではないが、明日の日本の発展と成長を推進するにはこの厳しさに耐えうる多くの若い力が必要なのである。

就 職 報 告



建設工学科
(建築工学コース)

就職委員
福田由美子

平成18年度(平成19年3月卒業生)の就職・進学状況についてご報告します。景気的好転が言われている中、建設業界でも一昨年頃より企業からの求人数が増加してきております。求人の特徴は以下の通りです。①求人時期の早期化:例年に比べ半月～1月ほど早まっております。②地域の広がり:全国規模の企業からの求人が増加した一方で、地方の企業が採用を控えるケースが見られ、地元志向の学生にとっては厳しい状況でした。③人間的に魅力のある人材が望まれる:コミュニケーション能力、リーダーシップ、熱意、バイタリティ、専門知識等々、企業は学生の資質を多面から評価してきています。

そこで本年度は、全体的に試験時期が早まっていることを勘案し、コース教員全員が、就職への準備を早期に始めることの指導を行ってきました。その結果、学生の対応は3月中旬(3年次)の時点で8割の学生が大学院進学希望大学や就職希望先の会社を絞っていました。このように学生の早くからの進路意識の高まりと企業の求人活動の早まりが合致して、前年と比べ多くの内定が早く得られ、半数近くの学生が資本金100億～1000億円、10～50億円の大手・準大手企業に内定しました。平成19年1月15日現在、97.5%の内定率(卒業予定者91名)で、業種別では、総合建設業、設備工事業が91%、設計事務所が3%、製造業が4%、その他が2%となっており、ほとんどの学生が建設関係の分野に内定しております。そのほか、大学院進学内定者が8名、また、女子学生も就職希望者10名全員が内定しております。

建築工学コースでは、大学の就職部が実施する「各種ガイダンス」や企業の人事担当者を招いての「就職シンポジウム」、「就職活動体験報告会」、「就職試験対策講座」、東京・大阪・福岡への「就職支援ツアー」等を積極的に活用するよう学生に指導しています。加えて、12～1月に、就職委員が全3年生を対象とした個別面談を実施しています。また、本学OB、OGをお招きしての講演会やパネルディスカッションも数多く実施してきています。現在は、個々の能力、実力が問われる時代で、如何に積極的に動けるか、主体的に行動できるかが重要になってきています。そのた

め、学生諸君が自らの意志を明確にし、適性を判断した上で、意欲を持って就職活動にあたるよう様々な指導を行っています。

また、近年は大学院進学者も、研究者への道というよりは、高度な技術、知識の修得を目指して増えており、より高いレベルでの人間形成への意欲がある者については、大学院進学者も奨励しています。

OB、OGの方々には、今後も、就職や進路に関連して何かとお世話になることがあるかと思います。若い学生たちが社会で活躍できるよう、ご協力の程よろしく願いいたします。

在 学 生 だ よ り



就職活動報告

建設工学科(社会建設工学コース)
山本 泰督(4年)

「納得のいく生き方」…就職活動は、まず自分が何をやりたいかを明確にする事が大事であると感じました。私は、土木に興味があったので土木関係の職種を選びましたが、人それぞれやりたい事が異なっているので職種は関係ないと私は思います。自分のやりがいがある職種を考え、自分が納得のいく生き方ができると感じた道を進んでもらいたいと思います。

「就職は足で稼げ」…会社を決める際の大半はPCで検索し、職種や勤務地、給料などの自分が一番大事にするものを調べて受けたい会社を決定します。ですが、自分の人生をかける会社なのでPCで会社の状況を調べるだけでなく、自分の足で会社説明会やOB訪問などに参加しPCではわからない会社の雰囲気等が自分に合っているのかを決めて受けてください。自分が就職したい会社を好きでなければ入社試験に向けての努力は出来ないと思います。

「メリハリのある生活」…入社試験に向けてこれまでよりも一層の努力が必要です。それにはまず生活のリズムを整えて健康である事が大切です。遊びと勉強の時間をきちんと分けて生活してください。これまで嫌なことから逃げていた人も自分で決めた道なので責任を持って努力してください。また、自分で納得のいく努力をしていれば自ずと自信が湧いてくるので試験に胸を張って向かえると思います。

「着飾るな裸になれ」…筆記試験は自分が対策をしていればクリアすることができます。努力は必ず自分の肥しとして返ってきます。特に重要なのは面接試験です。面接試験は成績や出身校など関係ありません。礼儀作法をしっかりとするのは当然のことで、中でも重要なのは「着飾るな裸になれ」ということです。分からないことは分からない、自分の意見をはっきりいう事が大切です。自分という人間は世界に一人です。ありのままの自分を会社にアピールしましょう。

「仲間」…今ここにいるのは、たくさんの人の支えがあるからです。思いやりをもち自己中心的にならないように気をつけてください。私は、宇野研究室の先輩や院生の方々に勉強会を開いていただき、自分にはない知識や観点を知ることが出来ました。これから、仲間達と議論等することで自分にはないものを見つけて欲しいと思います。

私の就職が成功したのは、指導教官の宇野先生、宇野研究室の院生の方、先輩方、仲間たちの支えがあったからです。皆さんも常に感謝の心を大切に、納得のいく道を勝ち取って下さい。



就職活動について

建設工学科(建築工学コース)
三谷 弘明(4年)

私の就職活動は、3年生の8月、ゼミ配属から始まりしました。ゼミでは、素晴らしい企業に内定された先輩方から絶えず就職活動の体験談を聞くことができ、私の就職に対する意識は徐々に高まってきました。自分自身での企業研究はや先生・先輩方の話を参考に、11月の初めに志望する会社を絞ることができました。

昨年から大学で企画された「東京就活フライト」を知り、私は真っ先に参加を申し込みました。東京に行った私は、第一志望である大林組によって施工された建物や本社を見学することで、自分の入りたい会社、やりたい仕事はこれだと確信し、広島に帰ってくることができました。

就職試験の高いハードルをクリアする第一歩としてSPI1に取り組みました。SPI1は限られた時間内に多くの問題をこなす必要があるため、慣れが必要です。私は3年生の8月から1月の全国模試、本番の入社試験に向け、SPI1の問題集を11冊×3回、時間を計りながら解くという特訓をしました。これで自信をつけた私は、本番でも何の不安なく試験に臨めました。

SPI1、専門筆記試験後は面接試験が行われました。私の希望する仕事である施工管理は多くの試験・知識を基に判断し、それを周囲に伝えるコミュニケーション能力が要求されます。面接官はこういった能力や人間性、意欲を見ていると思います。周りとのコミュニケーションをとり、厳しい施工管理の仕事でも続けることができる、自分なりの判断基準を持てる人間であるということを経験からアピールしました。また、面接では覚えてきたことを「言う」のではなく、「話をする」ように心がけました。

内定いただけただけの要因として、ゼミの先輩方がやる気に火をつけてくださり、東京フライトによってそのやる気を頂点に持っていくことができたことが大きかったと思います。さらに、ゼミの仲間たちと競い合うことでも高いモチベーションを持続できました。就職活動を終えた今、振り返って考えると、希望する会社を1日でも早く決めること、そして、入りたいと思う気持ちが強ければ強いほどその会社への道が開けると感じます。

私の就職活動は先生方を始め、先輩、友人の支えがあったからこそ乗り越えることができました。後輩たちに対しても、自分が先輩にしていたようなサポートを全力でしたいと思います。これから就職活動をする皆さん、頑張ってください。そしてぜひ、先輩方から続くこのサポート体制を続けていって下さい。



インターンシップ報告

建設工学科(社会建設工学コース)
野田 響(3年)

50th Anniversary

おかげさまで

建設コンサルタント
地質調査
測量
環境調査

株式会社東建シオテック

取締役支店長 佐々木 誠二

〒732-0001 広島市東区戸坂惣田1-3-15
TEL 082-220-1851 FAX 082-220-1482

明るく伸びる

伏

株式会社 伏光組

代表取締役 伏見 幸彦

本社 〒734-0013 広島市南区出島1丁目33-61 TEL (082)253-6161
FAX (082)254-4581
支店 松江 営業所 三次・安芸高田・世羅・益田・東広島

FUJITA

“高”環境づくりフジタ

広島支店/〒730-0037 広島市中区中町8-6
TEL (082)241-4131(代)

本社/〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷1-6-115
TEL (03)3402-1911

図るという熱い気持ちでスタートされたことと予想します。

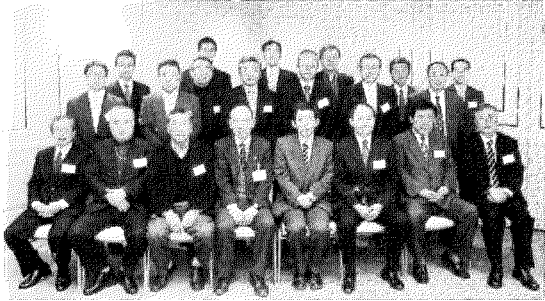
私の役目は、退職年齢が60歳から順次繰下が行くと思われるなかで、団塊の先輩方が元気なうちに当事の「熱い気持ち」を多くの若い会員に引継げる総会という場を提供していくことだと思っております。

そのために、まず総会出席率30％、30人を一つの目標にしています。

確かに、1年に1度集まって酒を飲み話すだけですが、ある本に、「人は会った人間の数だけ賢くなる」という言葉もあります。

広土会会長島先生の「広土会が技術力を高め生涯教育の場になることが会員をささえ合う大きな力となる。」に一步でも近づけるよう今後とも、関東支部としてより多くの会員参加を目指して、結束を図っていきたいと考えています。

最後に全国の広土会会員の皆さんが、健康に留意され益々で活躍されることを祈念して支部だよりと致します。



広土会の発展に思う

関西支部

吉実 洋仁（3期生）

平成19年の新年を迎え、広土会の皆様、誠におめでとうございます。

日本の景気拡張はいざなぎ景気の57ヶ月をも更新する戦後最長の経済成長を継続しているとの政府指標であります。我々の建設産業界及び庶民には実感無き景気回復で未曾有の混迷の年になりそうです。

これは小泉政治に端を発した競争原理の導入と共にマスコミ情報やそれによる国民意識の偏重が公共事業は悪の根源との風潮となり、関係者の一人として腹立たしい気持ちです。

公共事業は国民の生命や住みやすい国土の保全造りに大きく貢献し、現在の社会整備が世界水準に近い位置まで貢献したことは間違いない事実です。子々孫々までインフラ整備は継続していくことが我が国の繁栄と文明国家としての国策事業であり我々に課された一番の使命です。

私は3回生の団塊の世代です。いま一番危惧していることは2007年問題の一つ、団塊世代の定年退職が今年から始まる事です。それによる技術者の技術力や経験が後輩に伝承していけないことです。加えて昨今、若い力がこの業界を敬遠し他の分野へ転職したり学生が土木工学科を選考しなくなっていることです。

私が入社したのは昭和46年です。日本はいざなぎ景気やモータリゼーションの波で新幹線、高速道路、ダム等々が一斉に全国展開し社会資本整備の充実に国を挙げて取り組む時代でした。

事業は発注者と共に一緒になって地元説明を行い、地元とも良好な関係を築きつつ、良いものをどのようにしたら施工出来るか、お互いに知恵と工夫をし、寝食を忘れて取り組みながら、時には、酒を酌み交わしお互いの労をねぎらい失敗談と成功談を議論して技術力、新工法を磨いてきたものです。

平成元年から入札制度の見直しが行われ、それに伴い発注者と施工者との立場も発注者は施工者の管理監督の立場を強くしてきました。

これにより、発注者の技術力低下も増長し、コンサルタント、施工業者は平成6年（公共投資約38兆）をピークに19年（公共投資約17兆）は半減となってきており、リストラ等社員の減量化で全体的に技術力の低下は否めないのが現状です。

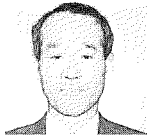
今後、我が国の社会資本整備の展望は数年後からは鉄筋構造物の寿命によるインフラの再構築、想定外の品質低下によるコンクリート劣化対策、地震対策、温暖化対策、環境対策、災害対策等々脚光を浴びて来ると想定されます。

土木建築産業は人類最古の産業であり、社会資本整備の縮小は国家の衰退と後退を意味し整備は不可欠です。また、日本人の心は聖徳太子が説いた「和の精神」にあり、歴史、文化の力を信頼し大切にしておくことにより必ず道は開けると信じています。

マスコミや国民の安易な情報にとられる事無く大学在校生、広土会の若い諸君が真の土木技術者を目指し日本国土の発展に深く寄与される事を願っています。

併せて、広土会の先輩、後輩の大きな力の輪が社会に脈々と継続し継承されて行くものと確信しているものです。

尚、関西支部は毎年、忘年会、親睦会を盛大にやっています。更なる増員と活況なる支部に諸先輩と共にやっていきたいと思っています。



広島支部活動報告

広島支部長

河原不二夫（3期生）

全国の広土会の皆さまには、益々で健勝のこととお喜び申し上げます。

一足早い団塊世代の卒業生は、もうすでに退職され、第二の人生や悠哉自適な生活を送っておられる方もおられます。

そんな中で、昨今の私たちを取り巻く話題には、あまり明るいものはありません。構造計算の不正事件、首長による談合事件など政官業をめぐる、毎日のようにマスコミに取り上げられ、あたかも建設業界が悪者のごとく言われています。

そんな暗い話題を吹っ飛ばすべく、来年の平成20年に、広土会は創立40周年記念事業を行ないます。

土木工学科から建設工学科、都市建設工学科へと変遷はありましたが、われわれの卒業した学科は40年にわたり4000人以上の卒業生を輩出してきました。卒業生は、建設業界のみならず、多様な業界で活躍されています。

広島支部は、広土会本部、各支部と協力し、広土会創立40周年記念事業の開催に向けて活動を開始したいと考えています。

以下のとおり、広土会創立40周年に向けた概略スケジュールを考えています。

平成18年7月29日

- ・第15回広土会支部長会議開催（三原市にて）
広土会創立40周年記念事業の開催を採択

平成19年4～5月頃

- ・40周年記念事業準備委員会の立ち上げ
開催日時、場所、規模の決定
開催内容の検討

平成19年7月頃

- ・第16回広土会支部長会議開催
記念事業開催内容の報告
各支部への協力依頼

平成19年12月頃

- ・第1回準備委員会の開催
実行委員会の組織編成
実行予算案の策定
参加費の設定
事業内容の詳細決定

平成20年3～7月

- ・数回の準備委員会の開催
趣意書、チケット等の印刷、販売
来賓の決定

講演会、懇親会の詳細スケジュールの決定

平成20年7月頃

- ・記念講演会、懇親会の開催

平成21年1月頃

- ・記念誌、会員名簿の発行
記念事業参加者に送付

平成21年5月頃

- ・記念事業報告会
記念事業収支報告及び承認
未来に向けて新たな団結と誓い

おおまかなスケジュールであり、多少の変更は生じるかもしれませんが、これから徐々に準備を進めていきます。

この40周年記念事業をステップとして、さらに会員相互の親睦や情報交換を一層深めていきたいと思っていますのでよろしくお願いします。

40周年記念事業を盛況に開催するためには、会員の皆様の協力が不可欠です。景気回復傾向とはいいいながら、まだまだ厳しい状態ではありますが、皆様のご協力をお願いいたします。

最後に、私たちを「教育は愛なり」という教えで育ててくれた「鶴学園 名誉総長 故 鶴 翼」様に、心よりご冥福をお祈り申し上げます。



阿讃支部報告 TOC(制約条件の理論)との出会い

阿讃支部

矢野 光広 (13期生)

昭和58年に広島工大の土木工学科を卒業し、以来25年間、測量関係の仕事に従事している。仕事内容は、現場作業からマネジメントする立場に変わったが、業界は激変している。公共工事は減少の一途をたどり、労働単価も下げ止まりの気配すらなく、競争もますます激化している。戦後最大の「いざなぎ景気」を超えたという実感は、全くといっていいほど感じられない。

一昨年の4月、部内にプロジェクトチームを立ち上げた。地上型3Dスキャナーを使用して新事業を立ち上げるというのが目標である。残念ながら、うまくいっているといえるような状況ではない。本当の原因は何だろうと悩んでいた時、信頼している上司に無理やり？読むように言われたのが「エリヤフ・ゴールドラット博士」の『ザ・ゴール』である。

マネジメントの本だから読みにくいと考えていたが、予想に反して中身は小説であり、読みやすく、おもしろかった。アメリカでは1984年に出版されたが、日本で17年間も翻訳出版が許されなかった本である。520ページある分厚い本を一気に読み、続いて『ザ・ゴール2』、『クリティカルチェーン』と読んだ。最初の2冊は工場・製造業の話であるが、思考プロセス（問題解決手法）を実行する論理ツールとして①現状問題構造ツリー②雲（対立解消図）③未来問題構造ツリー④前提条件ツリー⑤移行ツリーを用意しうまくストーリー展開しているので受入れやすい。

プロジェクトを実施する時、必要な資源(人や金)や納期(与えられた時間)に制約がある。プロジェクトが遅れる原因は、①学生症候群②掛け持ち作業(マルチタスキング)の弊害③依存関係に分類している。このような課題を解決するために「クリティカルチェーン」が誕生した。その特徴は、①マネジメントに人間行動の特徴を織り込む②不確実性(バラツキ)を織り込む、③投資判断の新しい尺度「フラッシュ」である。

何とかしなければと焦る私の気持ちを整理し、これからは論理的に解決しようと勇気づけられたTOCとの出会いを転機にしたいと考えている。

すでにご存知の方も多いと思いますが、プロジェクトに悩んでいる方や学生の方々に参考になれば幸いです。最後になりましたが、同窓生の方々のご健勝とますますのご活躍を祈念いたします。



広島西支部報告

広島西支部長

原田 忠明（9期生）

広土会会員の皆様におかれましては、各方面でご活躍され、益々で健勝のこととお喜び申し上げます。

広島西支部の活動状況ですが、総会を1昨年11月、会長の島先生、鈴木先生を御来賓に開催し、定期的な活動として、総会において川下事務局長（8期生）が年間予約した魚船の情報を会員に通知し、随時会員の皆様が利用され親睦を図っています。

また昨年7月には、三原市で開催された平成18年度広土会支部長会議を受けて、その報告と親睦のための役員会を行い、今年に入って2月3日に、新年会を兼ねた総会を開催しております。

私は、昨年の総会で宮田数行会長（4期生）の後任として会長を引き継ぎさせて頂きましたが、その理由として私が勤務する廿日市市役所に会員が40名強いこと、また長男が同窓の後輩になったこと、会長から若い世代での会の運営を要請されたことでした。今第1期生が還暦を迎えられ、広土会の伝統と歴史の重みを痛切に感じています。

土木工学を学んだ私たち広土会員の多くは、市民生活の利便性や快適性、また安心安全のための必要な社会資本の整備を担い、地域の発展に最も寄与する職業にもかかわらず、公共事業批判や財政悪化による公共事業の減少また低価格による入札などにより、労働時間に反映された給与が保証されないことにより、学生離れが進み、私たちの母校における都市建設工学科においても定員の確保が困難な状況にあると聞いています。

しかし、日本の社会資本の整備は未成熟であり、若い土木技術者への社会からの要請は、今後高まり、学生には明るい未来が待っていると思っています。

私たちは、厳しい環境下であるからこそ、集い、語り合う必要性があると考えており、若い会員から第2の人生を始められた会員まで、多くの仲間が集う会にしたいと考えています。



県北在住12年目の近況

県北支部

増田 祐三（11期生）

安芸高田市高宮町佐々部、この地に広島市安佐北区より引越して12年目を迎えました。一般的には中山間地と称される地域ですが、住みやすくとても気に入っています。妻も私もこちらが故郷という訳でもなく、たまたま縁があったと思っています。しかしながら偶然とも思えるのですが、この近くには仕事の関係で何度か現地調査等に来ており、設計を手がけた構造物も既に完成しており存在感を示していました。引っ越しもつかの間、私はあわただしく名古屋に単身赴任の身となったのです。短い期間ではありましたが、1年2ヵ月後、単身赴任を終え在宅勤務の形態で帰ってきました。昨年より独立し現在に至っております。

県北支部からは、総会・懇親会等の案内をいただいておりますが、参加することもなく時間が過ぎ昨年初めて参加させていただいた次第です。正直なところ、身近にこれほど多くの同窓生がいらっしゃるとは思っていませんでした。快く迎え入れていただいた事に感謝すると共にこの場をおかりして、お礼申し上げます。

さて、建設業界を取り巻く状況は厳しく・・・と続けてキーワードを並べ記しても、皆様におかれましては既にご承知の通りであり、それぞれの環境、立場において模索し努力されていることと思います。時流に対応しながら、企業も個人も経済的自立を維持・発展する必要があり容易ではありません。このような状況のなかで、技術士また時代が要求した比較的新しい資格としてコンクリート診断士等もあります。以前の投稿にもありましたが、資格は持っていて当り前の時代です。あれば便利、なければ不便、便利な

方がいいな。語句は違いますが、聞き覚えのあるフレーズですね。現実には、もっと厳しいと認識しています。何歳になっても遅いということはないし諦めてはいけませんが、早いほど良いことも確かだと思います。

ご存知の方も多いと思いますが、現在ウィーン国立歌劇場の音楽監督というポストにある世界のトップ指揮者、小澤征二さんがいらっしゃいます。名前自体が世界ブランドと言えるのですが、一流ならしめているのは、普段の努力の結果と言えます。良い結果を生み出すために十分な準備をしているとも言えます。少しでも見習いたいものです。

最後になりましたが、皆様の益々のご発展とご健勝を祈念して終わります。



県東部支部報告

県東部支部長

古谷秀次郎（1期生）

会員の皆様には、お变りなくご活躍中のことと推察いたします。

昨年7月に当支部の三原市において、平成18年度広土会総会並びに第15回広土会支部長会議の開催を本部から島会長はじめ役員の方々の出席の下に支部幹事の総出で、手伝わさせていただきました。本広土会の「会員相互の親睦を図り、土木技術の発展に寄与する事」という目的をスムーズに前進させるべく、全員で遠慮のない意見を交わし内容の伴った会議を終えることができました。

これを機に、当支部へのご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

昨年は、建設業界にとりまして、独占禁止法の強化や低価格入社の横行など、まさに、構造改革元年となりました。中でも、土木事業は不良投資の代名詞であるかの如く扱われていると言っても過言ではないと思います。

残念ながら、母校の広工大における建設系学生（特に土木）の入学人気も、世間の低調ムードに影響されてか、低迷中であり、早急のイメージアップ・キャンペーンが必要とのことと伺った次第です。

その昔、中国・唐の功臣の詩に「人生意気に感ず」というのがあります。絶対絶命の窮地の人間は、気心の通い合うことのみを願って行動するわけで、名誉や金銭欲のためではないという意味です。土木技術者として、施工上の苦勞もさることながら、造った作品（建造物）を、意気を感じてこそ、人々の安全な暮らしに寄与できるものだと思います。

私が社会人になって、35年超の歳月が経ち、この間、一貫して土木施工現場に携わってきましたが、今改めて土木建造物とインフラ整備の意味することの重大性を認識させられております。

流行語大賞に「品格」というのがあります。土木技術者の品格として「人々に満足され」、自らも「信頼される」ことが最も重要な条件だと考えます。同時に、建造物の作者が誰かを何らかの手法で人々に知らせることが可能ならば、後輩の皆様に「将来は自分も、このような建造物の土木技術者になりたい」と夢を抱かせることができます。このようなキャンペーンへの取組も、OBの1人として、大切な役目ではないかと痛感しております。

最後になりましたが、当支部・三原市での広土会総会に多大なご協力をいただき、心から感謝申し上げ、支部報告とさせていただきます。



卒業生だより

点から線 そして絆へ

3期生一同

平成18年5月27日18時懇親会、28日午前中よりゴルフの一泊二日の日程で、暫く鳴りを潜めていた広工大土木3期の面々が、卒業35周年記念と銘打って、安芸グランドホテルに集合しました。

開始予定時間前というのに、20名近くがホテルロビーで本会さながらの歓談となった。

今回より、家族同伴での参加もあり、同期会というよりも親戚の集まりの様子を見せてきました。

3名の先生を含め総勢41名。

久しぶりの元気な顔、毎回会っている、見慣れた顔。その日は、天候にも恵まれ皆、とても良い顔をしていました。

我等、団塊世代ど真ん中。自分を取り巻く環境が目まぐるしく変化するなか、体・仕事・家族など自分自身の心配事がいっぱいある。

前回までは、まだ現役で、話題といえば、ほとんど仕事の苦勞話が大半であったが、この何年間で、話の内容が大きく変化してきた。

だが、その日の笑顔は、35年の歳月を忘れさせた。顔にしわの増えた者、髪が少なくなった者。容姿は、多少くたびれてはいるが、日本の高度成長を支えて来たという自信に満ちた顔である。

酒も入り、楽しく続いた会もお開きとなり、それぞれの部屋で気の合った仲間同志の二次会。小広間に集まり学生時代ヘタムスリッパ。規模は小さいが大宴会が始まった。まさに2回戦目である。深夜となるが、なかなかお開きにしようと言う者がいない。

束の間、いつもの自分から逃げ出せる唯一の3次元空間である。

話しながら、グラスを持ち、柱に寄りかかり、寝ている者。話足らず、元気に大きな声で話す者。

目覚めて我に帰り、「オーイ、そろそろ寝るか!」とひと言。本日? 日付は随分前に変わっていたと思うが、とりあえず、本日の締めは、この一言であった。

朝ゴルフ出発組は、大丈夫であったようである。

何事も、やり始めると「火」になり、とことん、やり始め、やり抜く広工大土木3期のチームワークは、35年過ぎても衰えてはいませんでした。

思い出を語るには、二日間では余りにも短い時間であった。

鈴木、島、二神先生にご出席をしていただき、小講義、大講演会あり、ありがとうございました。

次回、40周年会での再会を約束し、宮島を望む会場を後にしました。

2008年、我等の仲間のほとんどは、「還暦」を迎える。この年齢になると、新たに親しい友人をつくることはむづかしい。大切な家族・親友と言える友。「一人で生きているんだ」と勘違いするくらい落ち込んだ時、それから抜け出すのは、一番は家族、友人・・・。

人のつながりである。「点から線へ、そして絆へ」頑張ろう。

卒業40周年会再会に向けて。

